上高井教育会報

第127号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　森山明治
編集人　会報編集委員長　勝山一男
印刷所　須坂新聞社

先生よろしくお願いします

同好会長　大森健嗣

ランドセルを背負った小さなうしろ姿を、母親がじっとたたずんで見送っている。子どもの姿が四つ角を右折して見えなくなっても、すぐには動こうとはしない。出勤前の誰もが心せわしい時間帯なのに。瞬時、考えにふけっていたようである。

「お早ようございます。」

振り返った時に、近づいた私の姿を見かけて、多少驚きの表情をみせながら声をかけてきた。A子の母である。

A子は入学当初よりはきはきとした、むしろ、元気のよい子どもである。そのA子が朝から沈みこんで腹痛を訴えてくることが時々あった。担任が心配して、屢々家庭と連絡をとってはみたが、その原因に思い当たる節はないと言う。A子が症状を訴えるのは母親が仕事で帰宅が遅かったり、多忙でとかくA子との会話が少ない時期であることがわかったのは、入学して数ヵ月を経てからのことであった。

「お早ようございます。」

「A子さん、元気でやっていますよ。担任の先生も表情が明るくなってきたと言っていますし……。」

「そうですか。有難とうございます。今朝、少し様子がおかしいと思ったものですからちょっと心配になりまして……。」

「校長先生、よろしくお願い致します。」

「心配はいらないと思いますが……。私も様子を見守っています。」

「すみません。先生、よろしくお願いします。」

母親は深々と頭をさげた。

学校には、様々な環境から、様々の生育歴をもつ、様々の子どもがいる。

中には、学習のおくれがちな子、落ち着かない子、沈みがちな子、不適応をおこす子等々、そして、家庭環境に恵まれずに心を病んでいる子もいる。

しかし、どの子ども一人をとってみても、その親にとってはかけがえのない大切な子どもであることに間違いはない。

一人ひとりの子どもには、親の熱い眼差が常に注がれており、限りなく深い愛情と多くの期待がかけられている。

子どもは、言わば、親の願いの凝集した存在であり、親に祈られた存在である。

「先生、よろしくお願いします。」

よく耳にするこの一言は、その場に応じた多様な意味をもつが、時には、親の深い愛情と子に寄せる切なる願いを先生にお願いするほかにやりようがなく、すがる思いで発するのである。

人間は、人間に育てられてはじめて人間になり得ることは、狼に育てられた子どもの例を上げるまでもなく、よく知られたことである。

したがって、人間が人間たり得る度合も、育てられる人間によって大きく異なってくるはずである。

また、小さい時の教育ほど子どもに強い影響を与える。義務教育は特に人間としての生き方の土台を築く時代である。したがって、その在り方が、子どもの生涯を左右することもあり得る。

考える程に、教育にたずさわるということは大変なことである。そのことの認識を深くもって、子どもとじかに接する我々は、常に自分自身の人格を磨き、教師としての力量の向上に努めなければならない。

教育は人なりと言われる。

本年度も十三の同好会がそれぞれの歴史と伝統をもって発足した。教育会員の加入率は七十％である。得難い講師を得ての好機・大いに研修を深めてほしいものである。

今日、研修の機会は多々ある。

要は、学ぶ意識の問題であり、教育に対する認識の深さの問題である。（旭ケ丘小）

教育会だより

7・8　教研集会分科会長・司会・記録打ち合わせ会（教育会館）

・13　第四回常任委員会。

・18　上高井教育会報第126号発行
—第12回教育懇談会特集—

・21　第五回代議員会

・27　上高井教育七団体連絡会結成（教育会館）

8・27　上高井教育七団体連絡会代表者会（教育会館）

9・5　教研集会中間連絡会（教育会館・市公民館）

・5　第五回常任委員会

・6　研究委員会委員長会（教育会館）

・16　第六回代議員会・信教各種研究調査編集委員会中間報告会(1)

9・21　上高井教育会報第127号発行

10・6　教育課程研究協議会

・12　上高井教育研究集会（墨坂中学校）

・14～15　第40回日本連合教育会諏訪大会本会より17名参加

・16　上高井郡市PTA連合会研究集会（須坂小学校）

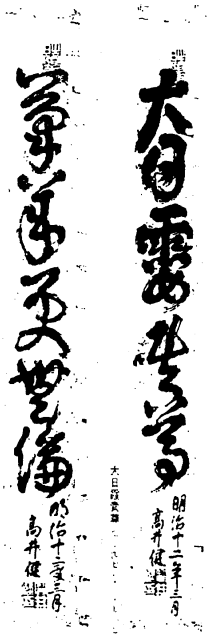
・24　第六回常任委員会

・25　研究委員会世話係委員長会(2)

・29　信教全県研究大会（相森中学校）

郷土の文化財 ㊹
河東王島神社の幟

小布施町　山王島



この幟は、高井鴻山七十四歳の時に揮毫したとされている。

読み方は、「大日貴尊霞む。萬歳無倫を更む」太陽の光が神の尊厳をかすめ守っている、萬歳をとなえて無道徳を改める、の意である。（望月）

夏季研修会に参加して

―― 夏休みは我々教師にとって、研修を積むよい機会となります。――
―― 本年度も多くの先生方が研修会等に多数参加されました。――
―― その中から貴重な体験感想をお寄せいただきました。――

カウンセリング等生徒指導研修講座に参加して

越　正行

生徒指導に関する研修講座が去る八月三日より三日間、中野西高で、小中高の先生方一四四名の意欲的な受講のもとに開かれた。

最近の学校教育での教科指導、生活指導等は、複雑多岐にわたる問題をもっているが、生徒指導の問題として、それを解決していくことが、教育をいっそう効果的なものにできると考え、この度の研修講座が設けられた。

一日目　感受性訓練

最近の実習は、「室内を自由に歩きながら、互いに挨拶を」でした。やたら自由に歩けと言われても困ります。相手かまわず「こんにちは」なんてできるはずがない。と思ったのは、最初の内だけでした。

次は、二人一組になり互いに自分のよさを語り、それを全体の前で発表することになった。相手のよいところは何か。相手の心を知るということは、かくもむずかしいことだ。学校でも、生徒と教師は、こんなところに気をつけよう。

二日目　YG性格検査を通しての人間追究

この検査は、矢田部ギルフォド性格検査のことであって、教育産業、臨床方面などで広範囲に用いられている。

先ず自分が被検者となって実施する。百二十個の問いの中には、「はい」でもなく「いいえ」でもなく、かといって、その中間の△でもないし、答えていくこと自身、大変だと実感させられた。

そのうちに、自分の性格プロフィールが描かれること、こういう性格なのかと思いながらこの検査は、性格をけっこう正確に反映していると思うのである。子どもの性格をもとに、その子の生き方を追究しその子に合わせた教育ができればと思う。

三日目　カウンセリングをもとにした生徒指導

カウンセリングのテープを聞き、クライエントが盛んに教師に話をするケース。話がなかなか進まず、カウンセラーとの会話が中断してしまう場合等、多くのケースを知りました。カウンセリングの本質は、生徒の気持をいかに深くその子の立場になって聞いてやることができるかということであり、このことは、時空間に限られたカウンセリングということではなく、児童・生徒への不断の接し方の基本的在り方といえるものである。

次に、グループ内で互いにクライエント、カウンセラーとなって、カウンセリングの実践です。クライエント役が悩みを打ち明け、それをカウンセラー役が静かに聞いて応えていく。そのうちに、つい本気になって、互いに真に迫っていくところは、研修の場を越えているかのようであった。

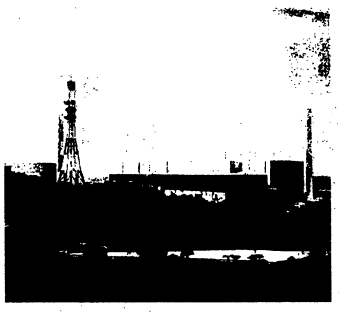
以上、この夏季講座で得たものは、高校の先生が言うには、ビシバシとやらなければならない現実の中にあるというが、しかし、子どもたちの心を十分に聞きとるところだけは、教師の立場として毅然としてもっていることが、子どものためにどんなにか意味深いことであるかを痛感させて頂きました。（豊洲小）

将来のエネルギーを考える――原子力発電

森泉慶二

資源の乏しい島国日本は今まで二度のオイルショックの苦い経験をして来ました。我々の耳に新しい「節約」「節電」等のことばも日常生活の中に生まれて久しくなりました。車を運転する私にとってガソリンの値段の変動も、刻々と地球のエネルギーがなくなっていく前兆の様に思えてなりません。地球が生まれて46億年。それに比べて人類の歴史の短いことは、周知の通りです。その人類が、偉大なる太陽系第三惑星を自らの手で、滅ぼそうとしていると考えるのは大袈裟でしょうか。そんなときこの夏休みの研修に浜岡の原子力発電所の見学の通知がとどきました。

原子力発電は、人類にどのような貢献をしてくれるのでしょうか、あるいは、害を与えるのだろうか、などと思いながら、長距離バスの旅は始まりました。

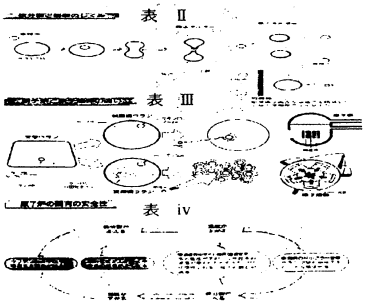


何といっても我々の記憶に新しいチェルノブイリ原発の事故が頭から離れないわけなので係の人に聞いて見ました。この事故は、外部からの電力がストップし、タービンへの蒸気供給が停止したときに慣性で回転しているタービンのエネルギーを所内でどこまで利用できるかの実験中の事故のようです。その時運転員は低出力時に炉心内で異常に蒸気泡が発生すると出力が急上昇するという型の原子炉の性質を軽視し、安全装置をもオフにするなどのため原子炉の出力が短時間で異常に上昇し蒸気の急激な発生で原子炉や建物が破壊したというものでした。そこで我国のそれはどうかというと表Ⅰの通りだそうです。

表Ⅰ

	チェルノブイリ事故	出力調整運転
炉心の特性	・低い出力範囲では炉心の特性が不安定なため、もともと低出力での運転者は禁じられている異常な事態が起きた。	・この出力で運転してはならない特性が安定しているはずの場合でも世界中に広く用いられている原子炉である。
試験の内容	・停止された低出力で長時間にわたり原子炉を運転した。 ・たまに回っているタービンからの電力を所内で使うため、特殊な調整を実施した。	・定格運転からかけ離れた、非常に長時間と異常な運転の操作である。即ち安全基準で禁止が禁じられている運転である。
規制	・緊急時に炉心を停止する安全装置を切った状態で試験を行ったこと、数々の安全規則違反をして実施した。	・もちろん基本的な安全基準を切ることはない。

表Ⅱ



表Ⅲ

表Ⅳ

さらに係の人の説明ではっきりしたことは、表Ⅱの「核分裂と制御のしくみ」、表Ⅲの「原子炉と原子弾の違い」表Ⅳの「原子炉固有の安全性」です。そんな説明を聞いて、実際にタービン建屋と原子炉建屋に入ったわけですが、入る前に自己の持っている(?)放射性物質のチェックをし（電話ボックスの様な箱に入る）、安全服を着用し、IDカードの管理下ではじめて入れるのです。私も実際に原子炉の真上に立って来たわけですが、一番心配だった放射能は、最後の検査で0というわけでした。

原子力発電も完全に安全なわけではありません。我々の手で安心して子孫に伝える、クリーンな、地球を作り出していかねばならないのです。（常盤中）

新採研を終えて

～オリエンテーリングに学ぶ活動化の重要性～

伊藤幹高

四月から教壇に立ち一学期はあっという間にすぎていきました。通知票をやっとの思いで書きあげ、明日から夏休みという時に、先生方から、「五日間も新採研、たいへんだねえ。」「ごくろうさま。」といわれました。本心どんなことをやるのだろうか、なにが自分たちをまっているのか、不安材料も多かったのですが反面、期待もしていました。今年から初めて宿泊をともなう研修であるために今までとはちがうのではないだろうか何か得られるのではないだろうかと思いながら、新採研を迎えました。

初日、二日目は長野市の柳町中学校で専門教科についての研修が行われ、三日目からは初任研試行ということで、望月少年の家に会場を移し研修が行われました。学校では子どもたちに「先生、先生」と呼ばれ、少なくとも「教える側」であった身分が一転して「教えられる側」に変わることはさほどの抵抗は感じなかったものの、学生の時とは少々異なります。というのは何かにつけて学校での教育とだぶらせて考えることが多くなりました。主事先生方の講義を聞くときにも、この「教材」は適切なのだろうか、子どもたち（ここでは自分たち）の実態に即しているのだろうか、又「場の設定」は適切であったか、などなど、自分でも理屈っぽくていやだなと思いながらも考えてしまうのです。そんな中で一番これは正解だったかもしれないという研修のひとつに、オリエンテーリングがありました。オリエンテーリングは地図と方位磁針と「かん」をたよりに野山をかけまわるスポーツですが、その日は朝から雨がふったりやんだりの天気で実施が危ぶまれていました。もし雨がふったらどうするのだろうと、他の先生方と心配していたのですが、運良く(?)晴れて雨あがりの林の中を走りまわりました。スタートするまではいやだいやだといっていた私もいざスタートしたら本気になり一時間半走りとおしてしまい、上高井地区で構成された我がチームが優勝することができました。体を動かすことは、子どもたちも大好きであることを身をもって証明したように思います。しかし、私と一緒に走らされた先生方にははなはだ迷惑だったかもしれません。この場を借りておわび申し上げます。

五日間の研修でえられた多くのことをこれからの生活でいかし、より充実した指導をめ差していきたいと思います。

（豊丘小）

カウンセリング研修会に参加して

奥原由孝

「奥原先生、そろそろ参加されませんか?」恐れていたものがついに来た。まさにそんな気持ちだった事を思い出す。

本年度のカウンセリング研修会は、八月三、四、五の三日間中野西高校で行われました。梅雨明けが遅れた今年の夏でしたが、ようやく暑くなり、絶好の研修会日和!?、私はハンケチではなくタオルをバッグにつめ込みエアコン全開で出かけました。

研修会初日は、県教育センター専門主事倉田孝雄先生の全体講義で始まりました。カウンセリングには、専門のカウンセラーが行う純粋なものと、どこでも誰でも行えるものとに大別できる。学校現場で日頃行われているのは後者であるが、どちらにも共通して大切なのは、カウンセラーの相談的姿勢、所謂カウンセリングマインドである。このカウンセリングマインドこそ我々教師が生徒指導にあたるうえで常に踏まえておく必要のある基本姿勢であるという内容を具体的事例も交え説明をいただきました。

先生の講義の中に、「先生方は職員室に子供よびつけて、しかも多くの先生方の前で叱りつけた事はないですか、どうしても教師は心理的に安全な場所で構えようとしがちであるが、子どもは全く逆の立場なんですね。」というお話がありました。自分は、一学期中に何度生徒を職員室へよび出し大声で説教した事か。時には全員を呼び、入り切らないという事で職員室前の廊下に正座させておいたなんて事もあったっけ……さてあれは。また、こんなお話もありました。「先生方、生徒にとっては、へたな助言より、先生が自分の心の不安を親身になって聞いてくれたんだという喜びによって自立できたという例もあるんですよ。聞いてあげるだけで立派な援助になるんです。」まず脅迫、十分びびらしておいてから「いつやったの～」脅迫面接一辺倒に終始してきた自分は……。

今年で教職五年目。そういう意味では随分教師らしくなってしまったなあ、今の自分をつくづく反省する機会を得た。これは神様が与えた試練か?いや眼鏡の奥の目がとても優しい某先生の一言から。

研修会への参加意義がすわると、取り組みも違ってきます。二日目、三日目にはテープカンファレンスからミニカウンセリングへと続き、より実践的な研修へと進みました。

二学期が始まり何が変わったのかと言われると困りますが、以上貴重な紙面を拝借しての報告を終わりとします。

（高山中）

生涯教育研修会に参加して

渡辺宣裕

八月二日・三日と県教育センターで生涯教育の講座が開かれた。

臨時教育審議会の答申にもあるように、今日重要な課題であるにもかかわらず、私自身は漠然とした感じでしか捕らえていなかった。

生涯教育が今日のように叫ばれるようになってきた経過は、次のようになってる。

昭和四二・四三年の日本ユネスコ国内委員会「社会教育新しい方向・総合的生涯教育に関する検討」

昭和四六年の中央教育審議会答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」

昭和四六年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対応する社会教育のあり方について」

昭和五六年中央教育審議会答申「生涯教育について」

昭和六〇～六二年にかけての臨時教育審議会答申「二一世紀に向けての教育の基本的なあり方」

これらを受けて、文部省は生涯学習局を設けてそれを初等中等教育局の上に位置づけ筆頭局とし組織の改革を行った。

しかし、私達は国がやるからという消極的な姿勢でなく現在社会の子供をとりまく状況と変化を的確にとらえて、青少年期にあたる義務教育の中で、どのようにしていったらよいかを探っていかなければならない。

今どきの子供・親・教師を見ると、共通していることは無感動・無感謝・刹那的・結果主義が年ごとに強まっているということだ。また、信頼感がうすれ、互いに頼りにならないと思っている親と教師に挟まれている子供。さらに教師に対しても「でもしか先生（言われたことは何でもするが、言われたことしかしない先生）」と厳しい言葉を聞いた。教師も自分の姿勢を謙虚にみつめ、低下してきているといわれる学校の教育力を取り戻すよう努力しなければならない。

また、子供の生涯にわたって生きてはたらく力をつけてやりたいと思う。

（東中）

火ばち談議

知恵のつき始めた猿が最近思うこと

武田洋幸

最近の景気のよさを反映してか値段の高い商品がよく売れているそうだ。ただ、この高級志向は単なる高級化、値段が高ければ良いというものではなく、個性化といった色彩が強いようだ。

自動車、電化製品、住宅、家具、一つ一つを並べてみると、「そういえば」と納得もできる。他人も持ってはいるが、少しは違う、より多機能なものを求めれば当然、高価なものになってしまうだろう。しかし、ここでいう他人と違うもの、というのは、他人より高いものを得ることに購入の目的をおいているのではなく、自分の好みに合ったものを示すのである。

以前ならば商品購入の際には、周囲を目安とし、同じものを買えば特に問題はなかったし、「あの人も持っている、しかし、自分も持っている」と満足できた。

人と同じであることはとても安心できる。意見を聞かれれば「同じです」と答え、挙手をするときはだれかに合わせる。そうしていれば、まず間違いはないのだから。これは生徒のことではなく、我々大人のことでもある。何もわざわざ意見の対立をすることはない、これが利口な生き方と言われ、それはだれも教えてはくれないが、いつの間にか身につけてしまう処世術なのだと思う。生徒に授業で「意見を言え」と要求するが、要求する教師が利口に振る舞っているのだから、子供たちが馬鹿になれるはずがない。

社会に出て二年目、世の中の仕組みが少しずつわかってきた。同時にいやな面で「自分は日本人だな」と感じる。不愉快にさせないために自分を押さえてもどこかに自分を出したい。商品の高級化、個性化は、金余り現象の産物だけではなく、利口者のはけ口でもあるような気がする。

（墨坂中）

ヨーロッパ二人珍道中かけ足旅行フリー旅

関育代

この四月から、結婚のため長水より、上高井・仁礼小学校におせわになり、そろそろ半年になります。夏休みの間大勢の先生方にご迷惑をかけつつ、でかけた三週間のヨーロッパ新婚旅行は、微力な私に、皆さんと共に教育の道を志そうという決意を新たにさせてくれました。二度とないであろうこの旅行を自分たちの手でつくりあげ思い出多きものにしたいと、全くのフリー旅行に的をしぼり格安の航空券をさがし求めたのが五月中旬。できるかぎりの情報を集め、不安な思いを残したまま休みの二日目、七月二十八日の朝一番の電車で須坂の地を離れた私たちでした。荷物といえばスーツケースにアタックザックとかたかけかばんを一つずつ、腹には貴重品袋を巻いて、ジーパンにTシャツというラフな姿を、海外旅行の旅立ちと誰が思ったことでしょう。

さて、第一日目からハプニング続きだった旅行も、私に（たよるものは、自分自身とお互いだけという）勇気を与えてくれました。

出発一時間おくれの中国民航機の中で、ドーバー海峡を二度渡らねばならない大変さ（チューリッヒ経由であった）に気づいた私たち。そのドーバーを渡る夜行バスの中でパスポートをなくしそうになったり、やはり、帰りの便内でみやげ・フィルムの入ったザックが出てこず（むこうのミス）後日送ってもらったり…しかし後は、カタコト英語と会話集のおかげで、食事もなんとか取れたし（スペイン広場の近くのトラットリアで『ブタの脳みそ』が出てきたのには驚いた）ホテルも二人で三千円程度のを見つけ、言葉通り、自分たちの旅行が出来たことに、満足ではあります。しかし、正味十八日間での、七ヶ国（英国→オランダ→西独→オーストリア→イタリア→スイス→フランス→英国）訪問では、いいところを少しかじっただけのかけ足旅行にしかならなかったのは、いうまでもありません。夜行を五日使い、足が棒になる程歩き続け、日没のおそいのをいいことに夜中十二時頃まで観光した時もありました。そんな中でも、風車の力強さ・ラインのおだやかな流れ・夢みるロマンチック街道、メルヘン街道・宏大なユングフラウヨッホ登頂・ムーアがどこまでも続くハワーズ…そしてその土地土地にあった人々の気質に少しでもふれることができたことは、私自身大きな成長となりました。ありがとうございました。

（仁礼小）

学級内の差別の実態調査から

上野徳興

先日、六年の自分の学級内の差別の実体の一部を知ろうと、児童にアンケートをとってみた。その結果について述べてみたい。

まず、殆んど全ての児童が過去一年以内位で、「友達の気になることを言ったりしたりしてばかにしてしまったことがある」と答えている。

「悪口」（八割）、「体つきや病気のこと」（二割）、「あだ名」（六割）等を言ってしまったや、「仲間はずし」（二割）、「はたく・ける」（五割）、「物をかくす」（一割）等をしてしまったが主なものであった。

なぜしてしまったかと言うと、殆んどが遊び等の中でおこり、「けんかになって相手がにくらしいから」とか「おもしろ半分で」等であった。

次に、「友達が気になることを言われたりされたりしてばかにされているのを見た」と答えている児童が約半数いた。そのときどうしたかと言うと、一割の児童が「自分も気になることだから」と注意したり励ましたり仲間に誘う等積極的に行動し、残りの四割の児童が、「かわいそうだから」と同情して注意している。しかし、残りの五割の児童は、「自分も巻き添えになってやられたらいやだ、自分に関係がない」等の理由で何もしないでいた。

ところで、今の学級は、私が今まで担任してきた学級と比べても、特に差別の多い学級ではないし、むしろ、素直でやさしい子が多く、困っている級友を支える事もできる。

しかし、子どもたちの自我の出やすい遊び等の場面を中心に、お互いに、相手の気になることを言い合ったりし合ったりしてしまうのである。

この調査から、みんなで努力していかなければ人権は守っていけないことを、子ども達の日常生活の中でおこる気になることをみんなで一つ一つなくしていく実践を通して気づかせていくことの大切さを改めて思い知らされた。

（小山小）

編集後記

今年の夏休みはいつもより長く、ゆっくりできたかというと、何か仕事があり例年と同じく、あわただしくすぎてしまいました。忙しい中、原稿をお寄せ下さった先生方、ありがとうございました。

（係　渡辺・望月）